

## Ichthyological Research 62 卷 2 号掲載論文 和文要旨

### 本邦沖の深海底から得られたホラアナゴ科の 1 新種 *Haptenchelys parviocularis*

田城文人・篠原現人  
本論文 62(2): 115–121

小笠原諸島沖, 伊豆諸島銭洲沖, 紀伊半島沖, 高知沖および沖縄島沖の水深 4,093–4,866 m から得られた 15 標本 (全長 467–840 mm) をもとに, ホラアナゴ科の 1 新種アンコクホラアナゴ (新称) *Haptenchelys parviocularis* を記載した. アンコクホラアナゴ属 (新称) *Haptenchelys* には, これまでに *Haptenchelys taxis* Robins and Martin in Robins and Robins, 1976 のみが知られており, アンコクホラアナゴは *H. taxis* と総脊椎骨数が 127–137 であること (vs. 123–133), 尾部脊椎骨数が 90–98 であること (vs. 87–94), 吻長が上顎長の 42.5–53.1 % であること (vs. 53.3–63.6 %), 眼は鰓孔よりもはるかに小さく, 眼径が鰓孔長の 37.5–59.4 % および上顎長の 11.8–16.9 % であること (vs. ほぼ同長もしくは眼が大きく, 鰓孔長の 84.4–157.6 % および上顎長の 18.4–25.1 %), 眼は口裂の中央付近に位置し, 口裂後端までの眼後長が頭長の 23.5–32.5 % および上顎長の 40.5–50.9 % であること (vs. 口裂の中央よりも後方に位置し, 頭長の 11.5–18.2 % および上顎長の 19.3–31.4 %), 鰓孔長が頭長の 15.8–22.1 % および上顎長の 24.8–35.7 % であること (vs. 頭長の 9.0–14.1 % および上顎長の 15.1–24.1 %), 鰓孔が体軸に対して斜位であること (vs. 体軸に対して平行) で区別できる.

(田城・篠原: 〒305–0005 茨城県つくば市天久保 4–1–1 国立科学博物館動物研究部; 田城 現住所: 〒625–0086 京都府舞鶴市長浜 京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所)

### イチモンジタナゴの遺伝的集団構造と人為的攪乱

北島淳也・松田征也・森 誠一・小北智之・渡辺勝敏  
本論文 62(2): 122–130

絶滅が危惧されるイチモンジタナゴ *Acheilognathus cyanostigma* の遺伝的集団構造とその人為的攪乱をミトコンドリア DNA シトクロム *b* 遺伝子の塩基配列によって調査した. ハプロタイプネットワークには 3 つの主要なクレードが含まれ, そのうち 1 つは琵琶湖・淀川水系と人為移植が明らかな場所を含む複数の地点から見いだされた. もう 1 つは伊勢湾周辺域からのみ見いだされ, 残る 1 つは主に由良川と加古川水系から得られた. これらの分岐年代を真骨魚類の分子時計情報を用いて推定したところ, 更新世前期の鈴鹿山脈の隆起などの地理的イベントと整合的な結果が得られた. 広域分布するハプロタイプは, 琵琶湖・淀川水系からのアユの放流に混入した人為移植の結果であると考えられた. 琵琶湖・淀川水系の集団は, もとの生息地では極めて絶滅が危惧される状況にあるが, 人為移植先では同種在来集団との交雑や置き換わり, あるいは他のタナゴ類との競争といった外来種問題を引き起こしている. それらの移植集団は, 地域群集への悪影響に関する慎重な検討のもとで, もとの生息地における再導入や遺伝的補強のために用いることができるかもしれない.

(北島: 〒464–8601 愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院環境学研究科; 松田: 〒525–0001 滋賀県草津市下物 滋賀県立琵琶湖博物館; 森: 〒503–8550 岐阜県大垣市北方 5–50 岐阜経済大学; 小北: 〒917–0003 福井県小浜市学園町 1–1 福井県立大

学海洋生物資源学部；渡辺：〒606-8502 京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科)

## 真骨魚類における上尾骨：相同性に関する問題

Michael H. Doosey · Edward O. Wiley

本論文 62(2): 131-144

従来、真骨類の上尾骨は、椎体や尾鰭の他の要素の位置とは関係なく、前から後ろへと順番に「上尾骨 1」, 「上尾骨 2」のようにラベル付けられてきた。しかし、近年の下位真骨類（カライワシ属魚類や *Hiodon* 属魚類など）やサケ類（*Thymallus thymallus* やサケ属魚類など）を対象とした尾鰭の形成過程の研究により、上尾骨に単純な順番を付けることは系統学的には意味のないことであることが示唆されている。本研究では、上位真骨類における上尾骨の形成過程が多様であることを示し、さらに、いくつかの形質が系統学的情報を持つことを示した。ここでは、さまざまな真骨類の種について、尾鰭の初期発生過程を上尾骨に注目し、記載した。いくつかの真骨類の種については、軟骨細胞が形成されることから記載し、ニシン・骨鰈類、サケ類、カラフトシシャモ、ヒガシホウライエソ、*Synodus foetens* については脊索屈曲期以降の上尾骨について調べた。今回調べた櫛鱗類では、上尾骨は脊索屈曲前に形成され、腹側の要素（下尾骨）との対応が明らかとなった。屈曲期後には、上尾骨と下尾骨の相対的な位置関係が変わることがあり、これが成魚での相同性について混乱を引き起こしていると考えられた。上尾骨は、発生初期における腹側の尾鰭要素との相対的な位置関係にしたがって名前を付けていくべきである（尾鰭椎前節 1 の上尾骨、下尾骨 2 の上尾骨など）。

(Doosey · Wiley: University of Kansas, Biodiversity Institute, 1345 Jayhawk Blvd., Lawrence, Kansas 66045, USA; Doosey 現住所: Tulane University Biodiversity Research Institute, 3705 Main St., Building A-3, Belle Chasse, Louisiana 70037, USA)

## アバチャン（カジカ亜目：クサウオ科）2 色彩型間の形態的差異

東海林 明・甲斐嘉晃・上田祐司・濱津友紀・伊藤正木・中坊徹次

本論文 62(2): 145-155

クサウオ科魚類の 1 種であるアバチャンに見られた 2 色彩型について、分布域および形態的な差異を明らかにした。日本海南部には黄色の糸状斑紋をもつ個体（黄色斑紋型）のみが得られたのに対し、日本海北部、オホーツク海南部、東北地方から北海道沖の太平洋においては、赤色の円形斑紋をもつ個体（赤色斑紋型）のみが得られた。24 計測形質に基づく主成分分析の結果、2 色彩型のプロットは大きく重なっていた。しかし、臀鰭軟条数と胸鰭軟条数の組み合わせをプロットしたところ、両者は明瞭に分離した。これらの分布域と計測形質における差異から、2 色彩型は別種あるいは亜種の関係にあることが示唆された。また、赤色斑紋型内において、いくつかの計測形質と計数形質において地域集団間に有意差が認められた。クサウオ科魚類の多くは大型沈性卵を産出し、仔魚は浮遊期をもたないとされている。赤色斑紋型内の地域集団間の差異は、アバチャンの初期生活史における分散能力が低く、地域集団間の交流が制限されているためと考えられた。

(東海林：〒625-8502 京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院農学研究科；甲斐：〒625-0086 京都府舞鶴市長浜 京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所；上田：〒951-8121 新潟県新潟市中央区水道町 1-5939-22 水産総合研究センター日本海区水産研究所；濱津：〒085-0802 北海道釧路市桂恋 116 水産総合研究センター北

海道区水産研究所；伊藤：〒031-0841 青森県八戸市鮫町下盲久保 25-259 水産総合研究センター東北水産研究所；中坊：〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学総合博物館)

## ジュズカケハゼ鳥海山周辺固有種の地理的分布と遺伝的多様性

千葉 悟・掛橋竜祐・渋川浩一・向井貴彦・鈴木康之・半澤直人

本論文 62(2): 156-162

ジュズカケハゼ鳥海山周辺固有種 (*Gymnogobius* sp. “Chokai-endemic species”) の地理的分布を調査した。その結果、本種は新潟県と山形県のため池やその周辺の水路 11ヶ所で生息が確認された。本種とジュズカケハゼ広域分布種 (*Gymnogobius* sp. “widely distributed species”) の分布域は重複するが、両種が同所的に生息する場所は認められなかった。また、mtDNA の塩基配列に基づき種内の遺伝的多様性の評価をおこなった。最尤法による系統解析の結果、本種は山形と新潟の 2 つのサブクレードによって構成されており、山形と新潟の地域個体群は遺伝的に識別が可能であった。このことから、それぞれの地域個体群を進化的に重要な単位として扱うべきであることが示唆された。各採集地における集団内の遺伝的多様性は著しく低く、それぞれの集団がビン首効果を受けたことが示唆された。また、山形個体群では、地理的距離が近い (3 km 以内) 2 つの集団がそれぞれ異なるハプロタイプに固定されていた。これらのことから、本種の生息地は人為的要因によって減少し、分断化と孤立が生じていることが示唆された。山形個体群の保全対策として、個々の生息地を保全するだけでなく、生息地間の遺伝的交流を促すことも必要かもしれない。

(千葉：〒305-0005 つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館分子生物多様性研究資料センター；千葉・掛橋・半澤：〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12 山形大学理学部；掛橋：〒739-8526 東広島市鏡山 1-3-1 広島大学大学院理学研究科；渋川：〒130-0022 東京都墨田区江東橋 3-3-7 長尾自然環境財団；向井：〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学地域科学部；鈴木：〒998-0022 酒田市駅東 1-2-10 月光川の魚出版会)

## 飼育水温がコイ科 *Pelecus cultratus* 仔魚の成長と生残に与える影響

Roman Kujawa · Grażyna Furgala - Selezniow · Andrzej Mamcarz · Mariusz Lach · Dariusz Kucharczyk

本論文 62(2): 163-170

コイ科 *Pelecus cultratus* について水温が仔魚飼育に与える影響を検討した。5段階の水温 (14, 18, 22, 26, 30 °C) を設け、各々を 50 L 水槽で 30 日間の飼育実験を行った。仔魚の飼育密度を 40 個体/L とし、餌料にアルテミアノープリウスを給餌した。飼育水温の影響を、飼育最終日の体サイズ、飼育期間中の成長速度、生残、肥満度で評価した。飼育 30 日で、30 °C 区の仔魚が最も高成長を示した (平均体重 374.2 mg, 全長 43.1 mm)。低水温区 (14 °C) の仔魚は最も低い成長を示し、飼育 30 日目の体重と体長はそれぞれ 32.2 mg と 19.4 mm であった。飼育水温は仔魚の生残率に影響を与えず、91 ± 5 % となった。本種仔魚は高水温でも高い生残能力を有することが明らかになった。

(Kujawa · Furgala-Selezniow · Mamcarz · Lach · Kucharczyk: Department of Lake and River Fisheries, Faculty on Environmental Sciences, University of Warmia and Mazury, Poland)

## 過飽和溶存ガスがコイ科 *Procypris rabaudi* 稚魚の生化学応答と生残に与える影響

Xiao qing Liu · Ke feng Li · Wen Jiang · Song Wu

本論文 62(2): 171-176

ダムなどの放水路からの高放水は全溶存ガス (TDG) の過飽和を招き、魚類に対するガス病 (GBD) の発生やそれに伴う死亡を引き起こす可能性がある。近年の中国では、多数のダム建設が深刻な環境問題となっている。そこで、本研究では長江上流域に生息するコイ科の固有種 *Procypris rabaudi* 稚魚について、過飽和 TDG が生残や生化学的応答に与える長期的な影響を調べた。*Procypris rabaudi* 稚魚を低レベルの TDG 過飽和水 (104, 108, 112, 116 %) および減圧脱気した対照水 (100 % TDG) に長期間暴露した。稚魚の生残率、および組織中のカタラーゼ (CAT) と活性酸素消去酵素 (SOD) の活性を生化学的応答の指標として、TDG 過飽和水の影響評価を行った。その結果、過飽和 TDG 区で GBD の症状が一部観察されたものの、稚魚の死亡は見られなかった。TDG 過飽和区では筋肉および鰓の CAT と SOD 活性が経過日数とともに上昇した。21 日間の飼育で、CAT と TDG の活性は、112 % および 116 % 過飽和区で対照よりもそれぞれ 1.5 倍と 1.9 倍高くなった。一方、104 % 過飽和区の CAT と SOD のレベルは飼育期間を通じて変化が見られなかった。CAT と SOD 活性の上昇は細胞から過剰な活性酸素を除去するために機能しているものと考えられた。本研究の結果は過飽和 TDG が魚類に深刻な影響を与え得ることを示しており、中国における水質基準策定と水生生物保護に対する基礎知見を与えるものと考えられる。

(Liu: School of Energy and Environment, Xihua University, 610039, Chengdu, China; Liu · Li · Jiang · Wu: State Key Laboratory of Hydraulics and Mountain River Engineering, Sichuan University, 610065, Chengdu, China)

## 短期絶食に対するニジマス稚魚の代謝応答

Maryam Azodi · Eisa Ebrahimi · Ebrahim Motaghi · Vahid Morshedi

本論文 62(2): 177-183

絶食が魚類の成長に及ぼす影響は環境や魚種によって異なるが、絶食に対する生体応答の詳細は不明である。本研究ではニジマス稚魚を用いて、短期絶食と給餌を繰り返したときの生理応答を調べた。実験では次の 5 通りの絶食・給餌スケジュールを設定した。対照群：60 日間毎日給餌。T1 群：1 日間絶食後 2 日間給餌を 20 サイクル。T2 群：1 日間絶食後 4 日間給餌を 12 サイクル。T3 群：3 日間絶食後 12 日間給餌を 4 サイクル。T4 群：4 日間絶食後 16 日間給餌を 3 サイクル。各実験終了後に血液を調べた結果、コレステロール、尿酸、クレアチニン、アルブミン、リポタンパク質などの血中濃度は各群間で差はなかった。また、血中の中性脂肪 (トリグリセリド) 濃度および血糖 (グルコース) 濃度は T4 群で有意に高値を示したが、体内脂肪重量や肝重量は各群間で差はなかった。以上の結果から、ニジマス稚魚は短期間の絶食に対して生理的な影響を受けないことが明らかになった。

(Azodi: Department of Fisheries, Faculty of Natural Resources, Isfahan University of Technology, Iran and Persian Gulf Research and Study Centre, Persian Gulf University, Bushehr, Iran; Ebrahimi · Motaghi: Department of Fisheries, Faculty of Natural Resources, Isfahan University of Technology, Iran; Morshedi: Member of Young Researchers Club of Ilam Azad University, Iran)

## 大西洋のみから知られていたウミヘビ科 *Mixomyrophis* 属の紅海から得られた 1 新種

日比野友亮 · 木村清志 · Daniel Golani

紅海から採集された全長 77.0 mm の標本に基づいてウミヘビ科ニンギョウアナゴ亜科の 1 新種 *Mixomyrophis longidorsalis* を記載した。本種は唯一の同属既知種である *Mixomyrophis pusillipinna* と臀鰭前および総脊椎骨数について類似する。しかし前種は後種と比較して躯幹長が短く全長比 22.3 % であること (vs. 28.4 %) , 背鰭前長が短く全長比 16.3 % であること (vs. 23.1 %) , 鰓孔前側線管孔数が多く 12 であること (vs. 9) および背鰭前脊椎骨数が少なく 22 であること (vs. 33) によって区別できる。本種のアナゴタイプは, *M. pusillipinna* が全長 65–80 mm で変態すると推定されており, なおかつニンギョウアナゴ亜科の各属では変態サイズがほぼ同じであること, および *M. longidorsalis* のアナゴタイプが幼形色斑を欠いており体表面に多数の淡色小斑点をもつことから, 変態後成長した幼魚と考えられる。本種のアナゴタイプの側線管は肛門中央直上に達しないが, この特徴が本種の成魚状態であるかどうかは不明である。本新種の発見により *Mixomyrophis* の分布範囲は拡大し, 大西洋とインド洋の両方を含む。

(日比野・木村: 〒517-0703 三重県志摩市志摩町和具 4190-172 三重大学大学院生物資源学研究科水産実験所; Golani: Department of Ecology, Evolution and Behavior, the Hebrew University of Jerusalem, 91904 Jerusalem, Israel)

### インド北東部アルナチャル・プラディシュから採集された 1 新種 *Creteuchiloglanis arunachalensis*

Bikramjit Sinha · Lakpa Tamang

本論文 62(2): 189–196

インド北東部ブラマプトラ川水系上流から採集された 1 標本に基づき Sisoridae 科の 1 新種 *Creteuchiloglanis arunachalensis* を記載した。本新種は脂鰭基底 (標準体長の 25.9 %) が *C. longipectoralis* を除く同属他種 (26.2–37.3 %) より短いこと, 上顎髭 (頭長の 71.2 %) が *C. macropterus* を除く同属他種 (75.2–99.8 %) より短いこと, 腹鰭前長 (標準体長の 45.4 %) が *C. brachypterus* を除く同属他種 (36.4–44.9 %) より長いことによって特徴付けられる。さらに, 本新種は以下の形質の組み合わせによって同属他種と識別される: 胸鰭先端が腹鰭起部に達しない, 腹鰭後端が脂鰭基部直下に達しない, 眼後部を除く体には薄いつぎはぎ模様がある, 上顎髭基部に白色斑がない, 後脂鰭長が標準体長の 10.1 % と長い, 直腸枝先端が丸い, 尾鰭両葉が同長, 尾鰭後端がわずかに膨らむ, 脂鰭が尾鰭から分離する, 尾鰭中央に幅広い帯がある。

(Sinha · Tamang: Zoological Survey of India, Arunachal Pradesh Regional Centre, Senki Valley, Itanagar-791 113, Arunachal Pradesh, India)

### 九州北部の農業用水路における希少淡水魚類の生息場管理手法の選択

鬼倉徳雄

本論文 62(2): 197–206

九州北部の主要な平野部において, 農業用水路に生息する希少淡水魚類の生息場管理手法 (保全か再生か) の選定のために, 3 次メッシュの環境情報を使って各種の分布モデルを構築し, それらの潜在的分布を予測し, 実測の分布データと照らし合わせた。予測, 実測ともに在の場合は保全, 予測で在, 実測で不在の場合は再生とし, それぞれに該当した種の数を数え, その数が多い方を各地点での管理手法とした。全ての種を同等に扱うケース,

潜在的な魚類相に基づいて対象を絞ったケースの 2 つを試したところ、保全・再生の効果は後者の方が高かった。後者のケースにおいてすべての管理が成功すると仮定した場合、各種の生息地は現在の 1.3–4.6 倍に増加すること、それらの潜在的分布域の 78–91 %が最適な生息場となること、現状の分布域の 64–97 %が保全地として残されることが示された。

(〒811-3304 福岡県福津市津屋崎 4-46-24 九州大学水産実験所)

### 琉球列島の砂底に「ミステリーサークル」を作るシッポウフグ属の新種 (条鰭綱：フグ目：フグ科)

松浦啓一

本論文 62(2): 207–212

琉球列島の奄美大島南岸の水深 15–18 m から採集された雌雄の 2 標本に基づいて *Torquigener albomaculosus* (新称：アマミホシゾラフグ) を記載した。本種は他のシッポウフグ属から以下の特徴の組み合わせによって識別される：背鰭条数 9–10，臀鰭条数 6，胸鰭条数 16 (最上部の鰭条は痕跡的)，胸鰭後部から尾鰭基部までの体側に暗褐色の 1 縦線や点列をもたない，頬に背腹方向に走る暗色の模様をもたない，頭部と体の背部は褐色の網目模様と白色点に覆われる，下顎から臀鰭起部までの頭部と体の腹部は多数の銀白色点に覆われる，そして頭部と体は 2 根を有する多数の小棘に覆われる。本種の雄は特異な形状を有する直径 2 m の産卵巣を奄美大島の水深 10–30 m の砂底に作る。

(〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館動物研究部)

### イチハラビロウドザメ *Scymnodon ichiharai* Yano and Tanaka 1984 (ツノザメ目：オンデンザメ科) の北太平洋西部海域からの再記載，およびオンデンザメ科の属の定義付け

William T. White · Diego F.B. Vaz · Hsuan-Ching Ho · David A. Ebert · Marcelo R. de Carvalho · Shannon Corrigan · Elisabeth Rochel · Murilo de Carvalho · 田中 彰 · Gavin J.P. Naylor

本論文 62(2): 213–229

オンデンザメ科の 1 種イチハラビロウドザメ *Scymnodon ichiharai* Yano and Tanaka, 1984 の再記載が日本と台湾からの模式標本と追加試料に基づき行われた。本種の生息範囲が台湾周辺海域まで広がられた。本種は近年ビロウドザメ属 *Zameus* に含まれていたが、インド洋・西太平洋南部の *Scymnodon plunketi* と形態的に非常に類似しており、分子生物学的研究から両種が姉妹種であることが示された。オンデンザメ科の 1 属 *Proscymnodon* Fowler, 1934 はイチハラビロウドザメ属 *Scymnodon* Barboza du Bocage and de Brito Capello, 1864 の新参異名であり、イチハラビロウドザメ属と近縁のビロウドザメ属の定義が新たになされた。イチハラビロウドザメ属には少なくともイチハラビロウドザメ, *S. plunketi*, *S. ringens* の 3 種が含まれ、*Proscymnodon macracanthus* (Regan, 1906) は、イチハラビロウドザメ属に含まれるがその有効性は不確かである。ビロウドザメ属はビロウドザメ *Zameus squamulosus* のみを含む単型属であると考えられる。

(White: CSIRO Marine and Atmospheric Research, Oceans and Atmosphere Flagship, GPO Box 1538, Hobart, TAS 7001, Australia; Vaz · M. R. de Carvalho · M. de Carvalho: Departamento de Zoologia, Instituto de Biociências, Universidade de São Paulo, Rua do Matão, Trav. 14, no. 101, São Paulo, SP, CEP 05508-900, Brazil; Ho: National Museum of Marine Biology and Aquarium,

Checheng, Pingtung 944, Taiwan, Institute of Marine Biodiversity and Evolutionary Biology, National Dong Hwa University; Ebert: Pacific Shark Research Center, Moss Landing Marine Laboratories, 8272 Moss Landing Road, Moss Landing, CA 95039, USA, Department of Ichthyology, California Academy of Sciences, 55 Music Concourse Drive, San Francisco, CA. 94118, USA, South African Institute for Aquatic Biodiversity, Private Bag 1015, Grahamstown, 6140, South Africa; Corrigan · Rochel · Naylor: Department of Biology, College of Charleston, Charleston, SC 29401, USA; 田中：東海大学海洋学部 〒424-8610 静岡市清水区折戸)

### 遺伝子同定で確認されたカリフォルニア湾奥部におけるカタクチイワシ科魚類 *Engraulis mordax* の産卵生態

Noé Díaz-Viloria · Laura Sánchez-Velasco · Miguel F. Lavín · Ricardo Perez-Enriquez · Sylvia P. A. Jiménez-Rosenberg · Victor M. Godínez  
短報 62(2): 230–235

カリフォルニア湾奥部において、ミトコンドリア DNA の 16S rRNA (479 塩基対) および COI (580 塩基対) 遺伝子領域の部分塩基配列からカタクチイワシ科魚類 *Engraulis mordax* の仔魚を確認した。湾北東部で多くの仔魚 (全体の 64 %) が採集されており、その環境 (水温 17–18 °C; 塩分 35.8–36.0 g/kg; 溶存酸素 5.5–6.5 mL/L; クロロフィル a 1.5–3.0 mg/m<sup>3</sup>) は、今まで本種では知られていなかった新たな産卵生態を示唆するものであると考えられた。

(Díaz-Viloria · Sánchez-Velasco · Jiménez-Rosenberg: Instituto Politécnico Nacional–Centro Interdisciplinario de Ciencias Marinas, unnumbered IPN St., La Paz, B.C.S. 23096, Mexico; Lavín · Godínez: Centro de Investigación Científica y de Educación Superior de Ensenada, 3918 Ensenada-Tijuana Road, Zona Playitas, Ensenada, B.C. 22860, Mexico; Perez-Enriquez: Centro de Investigaciones Biológicas del Noroeste (CIBNOR), 195 IPN St., La Paz, B.C.S. 23096, Mexico)

### *Dolichopteryx anascopa* Brauer 1901 (ニギス目：デメニギス科) の再記載

水澤信之・高見宗広・福井 篤  
短報 62(2): 236–239

デメニギス科ヒナデメニギス属の稀種 *Dolichopteryx anascopa* Brauer, 1901 の原記載は破損個体に基づき、不十分である。北西太平洋西マリアナ海嶺の南方海域から本種 1 個体が新たに採集された。この標本とホロタイプを用いて本種を再記載した。本種は腹側面に楕円形の不透明組織を有する管状の眼、背鰭基底下に位置する臀鰭基底始部、標準体長の約 3/5 に位置する腹鰭基底、背鰭基底より前方に位置する肛門、伸長する胸鰭条と腹鰭条、脂鰭があること、鰓耙数 31–32 (= 8 + 1 + 22–23) および脊椎骨数 43 によって本属の他種から容易に識別される。

(水澤：〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸 3-20-1 東海大学大学院海洋学研究科；高見・福井：〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸 3-20-1 東海大学海洋学部；水澤 現住所：〒140-0002 東京都品川区東品川 2-2-20 天王洲郵船ビル ニチモウ (株) )

### 黒色素胞出現パターンによるツマグロカジカ属 *Gymnocanthus* 仔魚 2 種の識別

山崎彩・宗原弘幸  
短報 62(2): 240–243

北日本に生息するツマグロカジカ *Gymnocanthus herzensteini* とアイカジカ *G. intermedius* (カジカ科) の仔魚は、形態が類似しているため識別が困難であった。本研究では、形態観察とミトコンドリア DNA を用いた遺伝子解析により、黒色素胞の出現パターンが 2 種の分類形質となり得るか検証した。形態観察により 2 グループに分けられた仔魚について遺伝子解析を行ったところ、形態観察による分類を支持し、黒色素胞の密度が少ない個体がツマグロカジカに、黒色素胞の密度がより多い個体がアイカジカに分類された。これらの結果から、仔魚期における黒色素胞の出現パターンによりツマグロカジカとアイカジカを識別することが可能であると判断された。

(山崎：〒060-0810 北海道札幌市北区北 10 西 5 丁目 北海道大学大学院環境科学院生物圏科学専攻；宗原：〒041-1613 北海道函館市臼尻町 152 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター臼尻水産実験所)